



集合写真



菊水楼



計画班発表の様子

第4回領域会議の開催と研究進展の共有

5月26日から27日にかけて、奈良市の歴史的料亭旅館である菊水楼にて、第3回領域会議を開催しました。今回は計画班・公募班から65名が参加し、初夏の穏やかな気候のなか、鹿が行き交う奈良らしい風景に囲まれて、2日間にわたり活発な議論が行われました。本領域では、BVOC(生物起源揮発性有機化合物)を介した植物と大気環境の相互作用の解明を目指しており、原子・分子レベルから生態系・大気科学までをつなぐ学際的研究を推進しています。今回の会議では、中間評価に向けて計画班の研究進展が共有され、データ取得や解析技術の高度化など、各班の成果が着実に蓄積していることが確認されました。また、第2期公募班からは新たな実験データや今後の研究計画が紹介され、多様な分野横断的議論を通じて、本領域全体の研究の広がりや連携の深化が感じられる会議となりました。

総括班会議と情報交換会

会議期間中には総括班会議も開催され、今後予定されている領域会議、国際連携企画、若手育成イベントなど、多数の活動計画について具体的な議論を行いました。本領域では、異分野研究者間の交流と連携を重視しており、研究成果を共有するだけでなく、新たな共同研究の創出につながる場づくりを進めています。1日目の夜の情報交換会では、奈良市の支援のもと、日本酒発祥の地ともされる奈良の文化を感じられる企画として、登酒店による利き酒企画が行われました。和やかな雰囲気の中で、植物科学、大気科学、分析化学、生態学など多様な専門分野の研究者同士が自由に議論を交わし、若手研究者を含めた新たな交流の輪が広がりました。本領域ならではの学際的コミュニティ形成がさらに促進された領域会議となりました。

 評価委員
 コメント

植物気候フィードバック第4回領域会議へのコメント 評価委員 京都大学生態学研究センター 高林 純示

今回は奈良市の菊水楼という由緒ある料亭で5月25日、26日に開催されました。会場は130年以上の歴史を持つ菊水楼旧館の3階でした。古くて狭い階段をギシギシと登っていった先にある会場には、松竹梅の3幅が掛けられており、本領域会議の場としてまことに相応しいおもてなしでした(考えすぎか)。

中間評価直前に実施された今回は、計画班6課題の進捗・計画報告に続いて、公募18班のうち17課題の進捗・計画報告があり、活発な議論が展開されました。公募は1期公募班から9課題、2期公募で新たに9課題の採択となっていました。新たな9課題中の4課題が大気関連の研究であり、植物フェノロジーから地球環境への接続が強化され、いよいよゴールに向けてラストスパートに入る体制が整ったという印象を受けました。

計画班、第一期から継続の公募班の研究の進捗と今後の展開に関しては、いずれも「文句のつけようがない」ものでした。引き続きユニークな成果が期待できると思います。手法に関して見ても、イソプレン、モノテルペンを本研究の「目付け」として、ピンポイント観測データを全球レベルへと展開する手法の開発、植物起源のVOCsが植物フェノロジーへの影響の定量評価、精密な環境制御による大規模操作実験施設の構築、PTRMSの効果的利活用システムの構築、新規質量分析法の開発、電子顕微鏡の精密イメージングなど、多くの革新的技術が確立され、あるいは確立されつつあることが報告され、本研究課題の重要な基盤が着実に形成されていると感じました。さらに、領域内の有機的な連携による優れた研究成果も報告され、かかる連携は高く評価できました。

分子レベルから個体群レベルまでの優れた成果報告の中でも、個人的には、植物ホルモンであるエチレン受容体ETR1がイソプレンの受容体である可能性が示されたこと、またその下流の転写応答の解析が進んだ点は、非常に興味深いものでした。複数存在するエチレン受容体に特異性などがもしあれば、更に面白い研究になると思いました。植物は大気中の微量VOCを、構造特異的な化学情報として認識します。「どのようにして受容→認識しているのか?」という謎に迫る可能性を秘めた優れた成果だと感じました。

全体を通して、植物の季節活動と気候との相互作用を「分子レベルから生態系・地球環境まで有機的に連携させて解明する」ためのプラットフォームの基盤形成は、残りの期間で完遂できるという印象を強く受けました。

アウトリーチ活動としての海外派遣、国際シンポジウム開催、国際研究ネットワーク形成、社会発信に関して、様々な取り組みが適切に実施され、また計画されていることが報告されました。さらに、事務局の支援による領域内インターシップなどによって、幅広い視野で国際的に活躍できる若手研究者が育ちつつあると感じました。近場の関連研究者、大学院生、学部生を巻き込んだ小さな勉強会(飲み会)などの気楽な活動の自然発生も今後は期待したい(もう発生している?)。国際的な認知度の向上にむけては、英語の専門書出版が計画されている点が特筆されます。あわせて、日本語の一般向けのシリーズ本の刊行などによる、中学生、高校生、社会人への啓発活動の取り組みも重要であると思いました。これについても今後に期待したいと思います。